

## 【あらすじ】

高校二年生のマモルは、早くに母親を亡くして父親と二人暮らし。母の命日にあたる週末、父は息子を庇うため交通事故にあり、死んでしまう。母の実家「桜川家」は千年の歴史を誇り、一子相伝で歴代が女性当主。補佐役の「お屋敷様」や家臣全員が女性という特異な体制をしいている。霊山の神を封印するために存在していたが、マモルの母、桜川ゆいが当主継承の儀を目前に家を離れて真條孝太郎と駆け落ちをしてしまう。絶大な霊力を誇っていた同家も当主不在の時間がつづき、その力が失われつつあった。両親を失い孤児となってしまったマモルは母を苦しい立場に追いやり、家を出なければならぬ元凶にしか見なしていなかった桜川家に嫌悪感を抱いていたが、弔問に来た同家家臣筆頭ほのかからの「新しい家族になりたい」という言葉を受けて次第に心を許していく。そして当主にはならないという条件のもと、彼は桜川家に身を寄せることにした。あたらしい生活が始まった直後からマモルは家臣たちの心を鷲掴みにしていく。

白壁学院高校登校初日、同級の藤代真穂子の襲撃にあう。そして今すぐあの家を立ち去らなければ命の保証はないと脅される。二日連続で学校で襲われた事態を重くみたほのかたちは、授業参観の機会を利用して襲撃現場を視察。謎の女、闇千代に出会う。ほのかとうりふたつの容姿をもっていた彼女は、精神攻撃をしかけてほのかの欲望を暴き出す。

一方で真穂子は敵性対象であるはずのマモルに別の感情をいだくようになる。新たな感情を払拭させ、桜川家当主になるという目的を完遂させるため、彼女は桜川家に乗り込み自身こそが正統後継者であることを宣言する。当主不在時の最終意思を決定できるお屋敷様はそれを公認したが、それでも次期当主はマモルであるとの裁定を下す。ただし、マモルに継承できない状況が発生した場合を除くとの付帯宣言もあった。これを真穂子は当主の座は実力で奪ってみせよというお屋敷様からの意と解釈し、屋敷をあとにする。

このあとマモルは、当主継承の儀と同義の神との結合の意味を改めて知る。また家臣たちは結合が確実に完了するための性的訓練対象であることに驚愕するとともに、「新しい家族」を謳ったほのかに裏切られたとの思いを募らせ、感情が爆発。屋敷を飛び出してしまう。桜川家での生活にも少しずつ慣れ、家臣たちとも打ち解けてきた矢先のことだった。

行くあてのないマモルはすべての源である霊山を目指していたが、バス車内にいた彼を真穂子は学校に拉致する。そして芽生えつつあった思慕の念を封じ、桜川家当主になるという藤代家五百年の宿願を果たすため、抹殺しようと試みる。だが逆に自分が深手を負ってしまう。闇千代はこの時、真穂子の計画を阻害するために動き出す桜川家屋敷に攻勢に出ようとしていたが、主人の危機を察知し現場に急行、治療を行う。しかし、体力的な回復は見込めずも気持ちは落ち込んだまま。神がマモルを庇った。わたしはもう当主にはなれないと発言する始末になってしまふ。マモルと合流したほのかに決戦を挑もうとするも、真穂子からの命により矛を収めざるを得なかった。この時ほのかは闇千代からの挑戦を受けた際、危地から彼を離脱させるため、霊山に瞬間移動させる。

突然霊山に飛ばされたマモルはそこで数々の命にかかわる受難に遭遇するも、ちはや・ちあきの援護によりどうにか危機を乗り越える。

幼いころより刻んできた野望と女としての情愛。このふたつの思いは真穂子の心に深い葛藤をいだかせることになった。身を削るような高熱にうなされながら自問自答した末に出した結論、それは望んでいるのは当主の座ではなく、マモルとの愛を深めていくことだということに気づく。

数度にわたり繰り広げられたちはや・ちあきVS闇千代・八雲との戦いだったが、決戦にあってちあきたちは絶対的な窮地に陥ってしまう。それを救ったのがほのかだった。彼女は闇千代たちに一時的に勝利したものの、一体化した闇千代・八雲に氷漬けにされ、戦場から離脱させたちはあきもマモルの身代わりとなって死んでしまう。

これに激怒したマモルは、封印を解き神を召喚。閻千代・八雲を抹殺する願いを聞き入れた神は二人を切り刻みながら殺していく。祈願主はこの時、神を動かす優越感と愛する者を殺した者への憎悪に囚われはじめていた。そこに現れたのが真穂子だった。彼女は二人の助命を嘆願し、このままいけばマモルは当主継承の儀をこの場で行わなくてはならなくなる。結合は神がいざなう最大の誘惑。それを拒むことなどできはしない。男であるマモルはなおさらだ。そしてそれはマモルの命が失われていくときでもあると説いた。時間が無い。二人の命を救うため、なによりマモルの命を救うため、抹殺を取りやめるように頼む。

それはならぬ、と突如現れたお屋敷様がいう。マモルには神と結合を果たして桜川家のために死んでもらわねばならぬとも。真穂子が答える。当主にはわたしがなる。あなたにとって理想の当主、神の子を生み、消滅する存在になる。だからマモルの命は助けてほしいと懇願するもお屋敷様はにべもなく拒否する。お前とマモルとは発現する靈力に雲泥の差がある。お前は桜川の女としては上出来だが、開祖以来の潜在的靈力を保持するマモルには到底かなわない。彼奴には母の罪を償うためにも桜川の人柱として死んでもらうと言いつつ。

事情を察したほのか、そして彼女と分かりあえた閻千代はわが身と引き換えに創造主であるお屋敷様の消滅をはかる。息絶えようとする彼女の前に現れたのは開祖、紀貫之だった。彼はそこにいたすべての者に謝罪するとともに、鶴（お屋敷様の本名）を恨まないでやってほしい。かの者に生を与え、桜川の存続のみを使命とし、愛を知るすべを与えなかったのはひとえに自分にあるという。傀儡（くぐつ）の肌が露出した鶴の手を握り、彼はその場から消えていく。

お屋敷様・ほのか・閻千代が亡くなり、屋敷は大炎上の末に消滅した桜川家。靈力もかつてほどの力は保持していなかった。だが、新しい命を迎え入れ、新生桜川家は新たな営みを始めていく。それは、まいやほのかが願っていた新たな桜川家、新しい家族を表していた。

#### 〈補足説明〉

まいの思い（奥ノ院での神との対話）

我が子が桜川に身を寄せるとき、その子はこの家を忌避する感情を持っているだろう。わたしはもちろん、孝太郎も死んだあとでないとここには来ない。その悲しみと怒りの矛先を桜川に向けるのは火を見るよりも明らかだ。とくにわたしは早世する。それは歴代当主が歩んできた道であり、逃れることはできない。当主最大の義務は子をなすことであり、育てることは望まれてはいない。わたしも早くに母を失い、お屋敷様の下で育てられた。我が子がここに来ることは、苦勞と災厄を与えるだろう。ありふれた生活が一変し、お屋敷様が当主継承の儀を強要するだろうから。

わたしが死んでも孝太郎がいる限り、お屋敷様は我が子に手を出すことはできない。自分の死が間近と判断したとき、わたしは孝太郎に靈力をすべて移譲する。そうすれば、彼は自分で靈力を操ることはできずともわたしの靈力は彼と我が子をお屋敷様から護るだろう。しかし、それも限界がある。その時が訪れば、我が子はこちらにやってくることになる。そこで神に頼みたい。我が子を護り、今の桜川家を崩壊させる手助けを。

あなたは罪を犯した。だが、もう千年以上前のこと。その罪は赦されていいころだ。そもそも、人が神を封印するなど身の程をわきまえぬ所業ともいえる。神とはすなわち自然であり、自然は人に恩恵をもたらすとともに、ときに災厄をもたらす存在でもあるのだから。禁固千年の罪をまっとうさせるために存立していたのが桜川家ならば、その役割はもう終焉を迎えている。ならば、神の子という不自然さに生まれ、生贄としての宿命を背負わされた桜川家当主の不幸を解き放ち、家臣たちにも自由に生きる選択を与えてほしい。

#### 神のまいに対する回答

お前の推測は正しい。封印されて千年がたった頃から桜川の靈力は明らかに衰えてきている。お前の祖父は人とは思えぬ靈力の持ち主だったが、時は彼奴の才能をそのまま継承させることを認めなかったらしい。靈力を

受け入れる器が小さくなっているのだ。ゆえに我が身が自由になるのもそう遠くはない。だが、それがお前の子の代なのか数代あとのことなのかは知らぬ。万年を生きた我にとって、数十年の時間差などないに等しい違いなのだ。お前が結合をしないというのなら、それはさらに早まる。しかし、自ら封印を解こうとは思わぬ。我は人に負けた。神であるわが身を人の尺度で罪人扱するための戦いに負けたのだ。なんとも人らしい愚かな行為といえよう。森羅万象に罰を与えようとするのと同じことなのだから。愚かなことではあるが、それこそが我とお前の祖父との間で交わした約定。破るわけにはいかぬ。しかし、お前の子が我を召喚し、封印を解くというのなら話は別だ。

お前は愛する者と結ばれたいがためにこの家を出ようとしている。結合が行われないことでこの家の霊力が弱まるのは、身勝手な行動の帰結によるもので我を思つてのことではない。なのに封印の力がさらに弱まったらお前の子を護るように頼んでいる。随分と虫のいい願いだ。だが、いいだろう。我はお前の子を庇護し、あだなす敵を排除することを約定しよう。その方が何かと面白そうではあるからな。しかし、それはその者が我との結合を求めぬときに限る。言っておくが、我を召喚し我を動かす誘惑に打ち勝てぬようではその者は結合を受諾してしまふだろう。我からの契りの問は人にとって最上の魅惑なのだ。お前の子がもし男であったなら、それはさらに強まる。女としての我を征服できる欲望を抑えられる男などいないのだから。

\*開祖は神との間に封印を解いた者には必ず結合の意思を問う約定を取り交わしていた。よってマモルにもそれを問う義務を有している。だが、マモルの霊的鍛錬の未熟さを知った神は今はそのときではないと知る。そこでマモルには「鍛錬に励め。その上で我は誓約を果たすだろう」と彼を抱擁しながら述べ、姿を消す。